

余命尽くし「いのちのケア」訴え

僧侶兼医師である田中雅博さんは、約30年にわたって仏教精神に基づく医療を実践してきた第一人者だった。平成27年7月にインタビューを受けていたときは、すでに膝臓がんに侵され、肝臓に転移していた。そのときの記事がきっかけで別の取材や出版の依頼が相次ぎ、「いのちのケア」の大切さを訴え続けることに余命をささげた。

世界保健機関 (WHO) は、緩和ケアが対処すべき苦痛のひとつに「スピリチュアルな問題」を挙げている。人生に関する問いや死への恐怖といった人間の根源的な苦痛を指す。田中さんはこれを「いのちの苦」と呼び、病院にはいのちのケア (スピリチュアルケア) を行う医師以外の専門職が必要だと唱えた。

原点は国立がんセンター (当時) で内科医として勤務を始めた20代のころ。終末期のがん患者に「私はもう死ぬのですか」と問われ、答えに窮した。30代でセンターを退職。大学に入り直して仏教を学び、生まれ育つ

田中雅博さん

追悼



た西明寺 (栃木県益子町) の住職を継いだ。境内に緩和ケアを行う診療所を建て、多くの患者をみとった。だからこそ、膝臓がんが見つかったときは「自分の番が来たか」と思えたという。

治る見込みがない自身の病状を説明するときさえ、田中さんは淡々と語った。医師らしく科学的根拠に基づき、僧侶らしく達観した口ぶりだった。

執着から自己を解き放つ修行として仏教をとらえ、般若心経をいのちのケアの経典

末期がんに侵された身で、「いのちのケア」の重要性を訴え続けた田中雅博さん

—平成28年4月、東京都内

であると読み解いて、よりどころにした。人には押しつけなかった。宗教とは「自分のいのちより価値あるもの」であり、「それぞれが自分にとっての宗教を見つければ、死の覚悟が据わり、どう生ききるかを考えられる」と説いた。

昨年4月、改めてお会いしたときに「死ぬのが怖くないのですか」と尋ねた。「怖いのだと思いますよ」。田中さんはそう答えてから「ただ怖くならないことを、ずっと目指してきましたから」と続けた。

「ブツダの域になりましたね」と水を向けると、「そこまでは言いません」と笑いながらも「近づくと私が私の生きがいです」と語った。柔和で涼しげな笑顔だった。

明治維新後に分かれてしまった日本の仏教と医療を、超高齢多死社会が待ち受ける今こそ再結合させる。それが、田中さんの最期の願いだった。わずかだったはずの余命を2年近く生き抜けたのは、少しでも多くの人に仏教と医療の在り方を考えてもらうことを、自らの使命だと受け止めていたからに違いない。

(小野木康雄)

僧侶兼医師の田中雅博さんは3月21日、がんのため死去。享年70。